

## 『篁物語』 伝本考

－補遺－

中 村 一 夫

### 1 はじめに ー前稿で確認したことー

本稿は前号に掲載した「『篁物語』伝本考 ー表記から見たー」に続くものである。前稿で取り上げられなかった語種と表記の関係、特徴について、考察を加える。まずは前稿で指摘した事項を箇条書きにして掲げておく。詳細は前稿につかれない。

各伝本の漢字含有率からは以下のことが確認された。

- 1) 江戸時代に書写された彰考館甲本・乙本、書陵部本の三本では、より多くの漢字を使用する書陵部本の方が読み取りやすさを求めていると見ることができる。ただし彰考館の両本の表記がよりオリジナルに近い（＝古い）という保証はない。
- 2) 彰考館甲本・同乙本・書陵部本は江戸時代初期の書写とされるが、漢字含有率を源氏物語の諸伝本と比較すると、鎌倉から室町の頃のそれに匹敵する。このことから、書写年代は比較的新しいものの、本文の表記そのものは古態を保っている可能性が高いと考えられる。
- 3) 2) の事実は鎌倉後期に写されたと考えられる承空本の存在に根拠を求めることができるかもしれない。四本を比較すると、本文そのものには大きな異同がなく、ほぼ忠実に本文を受け継いでいるように見えるからである。しかしながら、文字（特に漢字）の運用という面ではそれなりの違いが認められ、直接の書承関係にあったとは考えにくい。
- 4) 第一部と第二部では漢字含有率に変化が見られる。特に彰考館甲本・乙本で含有率が大きく上昇する。物語の内容面での繋がり不自然さとも関係するが、本来は書写環境の異なっていた別々の伝本が接合されたのではない。一方、承空本では両部の漢字含有率に大きな変化は見られない。

次に使用される漢字の種類から次のことを指摘した。

- 1) 使用される漢字の異なり語数、延べ語数ともに書写年代が最も古い承空本が最少となる。江戸期書写の三本とは明らかに異なった結果を見せた。
- 2) 四本ともに使用される漢字は全体の異なり語数 112 のうち 52 であり、これらは比較的早い時期に定着していた可能性が高いと考えられる。ただし

使用される箇所についてはばらつきがあり、彰考館本群と承空本・書陵部本群とは明確に分かれることが知れる。

3) 漢字含有率で確認されたことと同じ現象が見られた。すなわち第一部と第二部では同じ漢字でも使用傾向に変化が現れている。先に指摘した第一部と第二部の不自然な接合を証する一例と言えるのではないだろうか。

以上の指摘を踏まえて、次節の考察を行う。

## 2 語種と表記の関係

本節では前稿で検討できなかった語種と表記の関係について考えることとする。ある語がどのような文字によって記述されるかという点は、書写者による任意の選択にかかっている。しかしながら、無秩序にそれが行われることはなく、たとえば書写に使用した親本の表記の影響力は相当に大きなものであったに違いない。ただその影響力を具体的に測定するためには、書写に使用した親本（あるいは祖本）との直接的な比較が必要となろう。そこで、相対的に漢字で表記されることが多いと判断される漢語について、それぞれの伝本がどのように書記しているかを調査した。またあわせて漢字で表記される和語についても調べた。

表1を見られたい。これは漢字で表記される漢語の一覧を示したものである。左から順に使用される漢字・その漢字を含む実際の用例・品詞・語種が並んでいる。それらの右側には4つの伝本での使用状況を示す丸印をつけている。一行目の「一」は「一尺」という用例があり、彰考館甲本、同乙本、書陵部本、承空本のすべてで使用されていることを表している。2行目の「一」は「一首」という用例であるが、こちらは彰考館甲本と同乙本でのみ使用されている。そして右の二つの欄には、異同がある場合、彰考館本群と承空本・書陵部本群のそれぞれでどのような本文（表記）になっているかを記した。先の「一首」は、承空本・書陵部本群では「歌」となっていることを表している。

それでは、この一覧表から指摘できる諸点を検討していく。

まず、漢語における漢字表記の全体的な使用状況から、本文が二つの群に分かれていることが明確に知り得る。見られるとおり、彰考館甲本と同乙本、書陵部本と承空本では、それぞれが完全に一致している。そしてこの群の「垣根」を越えて、単独でもう一つの群に一致する用例は皆無であった。この現象は、前稿でもすでに指摘していたことではあるが、例外なく一致しているところから、各群の本文の同質性のみならず、書承関係の近さを十分予想することができるだろう。彰考館乙本は甲本の転写本であることはすでに周知のことであるし、書陵部本も「書写様式は異なるが、内容的にはこの承空本を親本としていることは明かで、一、二の不注意による誤写と思われる箇所を除いて、本文はまったく同じである。」(久保木哲夫「解題」、『冷泉家時雨亭叢書 承空本私家集 上』2002年)と指摘さ

【表 1 漢字で表記される漢語】

漢字	用例	品詞	語種	彰甲	彰乙	書陵	承空	彰考	書承
一	一尺	名	漢	○	○	○	○		
一	一首	名	漢	○	○				歌
右	右大臣	名	漢	○	○	○	○		
衛	兵衛	名	漢	○	○	○	○		
願	願	名	漢	○	○	○	○		
經	法花經	名	漢			○	○	法華經	
經	法華經	名	漢	○	○				法花經
言	大納言	名	漢	○	○	○	○		
三	三味堂	名	漢	○	○				ナシ
侍	内侍	名	漢	○	○				ないし
尺	一尺	接尾	漢	○	○	○	○		
臣	右大臣	名	漢	○	○	○	○		
大	大かく	名	漢	○	○	○	○		
大	大学	名	漢	○	○				たいかく
大	大臣	名	漢			○	○	大し	
大	右大臣	名	漢	○	○	○	○		
大	大納言	名	漢	○	○	○	○		
大	大王	名	漢	○	○				たいわう
大	大し	名	漢	○	○				大臣
納	大納言	名	漢	○	○	○	○		
兵	兵衛	名	漢	○	○	○	○		
法	法花經	名	漢			○	○	法華經	
法	法華經	名	漢	○	○				法花經
木	木丁	名	漢			○	○	几帳	
花	法花經	名	漢			○	○	法華經	
丁	木丁	名	漢			○	○	几帳	
臣	大臣	名	漢			○	○	大し	
首	一首	接尾	漢	○	○				歌
華	法華經	名	漢	○	○				法花經
相	宰相	名	漢	○	○				さいさう
王	大王	名	漢	○	○				たいわう
味	三味堂	名	漢	○	○				ナシ
帳	几帳	名	漢	○	○				木丁
屏	屏	名	漢	○	○				みね
宰	宰相	名	漢	○	○				さいさう
学	大学	名	漢	○	○				たいかく
堂	三味堂	名	漢	○	○				ナシ
几	几帳	名	漢	○	○				木丁
内	内侍	名	漢	○	○				ないし

れており、それらを裏付ける証左となりえる。ただし書陵部本と承空本の関係については、細部に異同や表記の違いも確認できるため、直接の書承関係があったとするのは早計であろう。

続いて、両群の違いに着目して、考えられることを述べる。承空本と書陵部本では一部の漢語を仮名書きしている。「ないし」や「たいかく」の他、「たいわう」「さいさう」などは字音を直音表記していた。また「木丁」は「几帳」を表すための当て字である。いずれも意よりも音を優先させる表記である。それに対して、彰

考館本群の漢字表記には解釈が入っている。上記の語は「内侍」「大王」「大学」「几帳」と書かれており、意を明確に示そうとしている。書承関係の前後関係をただちにうかがうことはできないだろうが、彰考館本の表記から承空本・書陵部本の仮名表記に開かれることはおそらくなく、逆に後者の仮名表記から前者の漢字表記は生成されうると考えられるだろう。読み取りやすさを求めるための漢字表記は、後世のものという原則に照らして、各群を位置付けたいところである。

一方、和語の表記はいかなる状況であろうか。一覧表は大きなものとなるため、紙幅の都合で省略に従い、使用される数とそこから指摘できる諸点について述べることにする。

漢字で表記される和語の異なり語数は 192 で、そこに使用される漢字は 90 種類であった。そのリストは次の通りである。

【表 2 和語に使用される漢字】 ※ゴシックは 4 本すべてで使用されるもの

一・二・三・四・七・廿・雲・煙・家・歌・河・火・花・我・顔・帰・橘・  
給・許・玉・空・君・契・月・見・後・御・語・行・国・今・佐・昨・山・  
使・子・思・事・侍・時・車・出・春・初・所・女・消・上・色・心・申・  
神・臣・身・人・水・世・瀬・成・石・千・川・霜・大・誰・男・地・中・  
鳥・程・殿・冬・道・日・入・年・物・文・返・銚・又・夢・名・命・木・  
夜・野・有・涙・浪 (90 種)

漢字で表記された和語 192 語のうち 4 つの伝本が一致しているものは 62 例、これとは別に彰考館甲本と同乙本が一致しているものが 33 例、同じく承空本と書陵部本が一致しているものが 49 例であった。それぞれの群を越えて、3 本が一致しているものがわずかながら見えるものの、総体的には漢語の場合と同じく、彰考館本群と承空本・書陵部本群で明確にグループの形成されていることが明らかである。

独自の漢字表記となっている和語は、彰考館甲本が 1 例（思ひ出づ）、乙本が 3 例（よしのゝ川・おほつか浪・成）、承空本が 3 例（みち中・うす物・いもせ川）、書陵部本が 24 例である。書陵部本では、「花橘」や「千鳥」「霜」「玉銚」などの名詞、「見す」「消ゆ」「出づ」「成る」「有」などの動詞のほか、副助詞「しも」を「霜」と記す例もあった。和語においては、書陵部本の独自の漢字使用が特に目立っている。このことは、極めて近い本文を持つ承空本が書陵部本の親本あるいは祖本であったとしても、後代の伝本が生成される過程のどこかで表記が改められていることを表しており、またそもそも片仮名漢字交じりの表記が平仮名漢字交じりに改められているのであるから、両本の書承関係に直接的な接触を想定するこ

とには慎重でありたい。ただし承空本から書陵部本の本文が生成される可能性そのものは否定できないのは言うまでもない。

他方、これまで書陵部本と彰考館本の近い関係が考えられてきたわけであるが、こと表記の面から鑑みて、こちらもまた直接の書承関係は考えにくいのではないだろうか。すなわち、漢語においても和語においても、互いに独自の漢字表記を持っており、いったん漢字表記されたものを再び平仮名表記に開くということは考えにくいからである。

### 3 まとめ

前稿で触れることが出来なかった語種と表記の関係について、調査結果を示し、その考察を行った。第2節で述べたとおり、前稿で指摘した伝本の性質や総体的な関係性および位置づけに関して、修正すべき点は見られない。各伝本の本文そのものは近いものの、彰考館本群と承空本・書陵部本群の二つのグループははっきりと分けることができ、またグループ内でも特に後者は表記に相違するところが少なからず存在しており、それぞれの書承関係や伝来を考えるにあたっては、このことを考慮する必要があるだろう。